

二〇一〇年三月二四日（住吉大社参加者一四名）

神域の奥へ奥へと春落葉	きづな
なほ読めぬ句碑春落葉払ひても	"
古り増さる百の灯籠春陰に	"
春の雨朱の反橋を渡りかね	"
高灯籠松の緑のなほ上に	"
春雨の水輪をつづる心字池	ひかり
境内は芽吹きの色に染まりをり	"
御神田を埋めて草の芳しく	"
春雨に踏む玉砂利の音高し	"
亀鳴くや降りには難し太鼓橋	かれん
春雨に濡れて古木の洞暗し	"
瑞兆のごと草萌ゆる御神田	"
狛犬の鼻こそばゆし黄砂降る	宏 虎
茎立てる空に引力ある如く	"
霾や黄色に染まる京の町	百 姓
落ちてなほ雅と思ふ椿かな	"
春雨の住吉参りまた楽し	百 合
御手洗の兔吐き出す春の水	"

春雨に翡翠一閃通りけり	はく子
石橋に春愁の鷺動かざり	"
拝殿の朱を明るふす春の雨	ぼんこ
春しぐれ思はず触れし芭蕉句碑	明日香
太鼓橋松の緑を両袖に	菜 々
花冷の駅頭人のあふれけり	よし子
朱の橋をくぐりくぐりて春の鴨	満 天
春愁や朽木然たる御神木	"

吟行句会みの選

二〇一〇年三月二四日（住吉大社参加者一四名）